宮城県図書館のルーツを訪ねて その1

～藩校養賢堂とその蔵書～

『仙台府学養賢堂図』（本館所蔵）より

今年、平成18年（2006）は、宮城県図書館の前身である宮城書籍館が明治14年（1881）7月25日に創立されてから125周年にあたります。公立図書館として全国でも有数の歴史を持つ本館は、和漢の古書を多数所蔵していることでも知られています。今号と次号の特集では、宮城県図書館のルーツともいえる「養賢堂文庫」、「青柳文庫」の2つの文庫をご紹介します。

養賢堂とは

・学問所の創設

18世紀には藩を担う優秀な人材の育成を目的として全国で藩校が設置されました。仙台藩でも、享保年間に儒員芦東山らが学問所設置を訴える意見書を提出したもののいずれも採用されませんでした。享保20年（1735）に至って高橋玉斎の意見書が採用され、元文元年（1736）に仙台北三番丁細横丁の西南角（現在の仙台市青葉区木町通1丁目内）の武沢源之進の屋敷を修復して学問所が設置され、四書五経など儒学の経典の素読・講釈がはじめられました。しかし、わずか十数年後には出席者が減少してしまったため、当時の藩主伊達重村は改革に乗り出し、通学の便を考慮して宝暦10年（1760）に北一番丁勾当台通（現在の仙台市青葉区本町3丁目内）の山田平治屋敷に学問所を移しました。安永元年（1772）からは学問所を単に養賢堂と称するようになりました。

・大槻平泉による学制改革

文化7年（1810）、大槻平泉が4代学頭に任命され学制の改革が行われました。まず平泉は財政基盤の整備に力を注ぎ、新田開発高12000石を「学田」とし、その年貢収入を中心に学校運営費とするなど、独立採算制による学校運営を行いました。設備面では、中心施設となる大講堂の建築に着手し、文化14年（1817）に落成。講堂は建坪567坪、25室を有する広大な建物でした。その後順次学寮・剣槍術所・聖廟など諸施設が整備され、大規模な教育施設となりました。幕府の学問所である昌平黌に学んだ平泉は、朱子学を正統な学問としたほか、学科の増設を行い教育内容の充実に努めました。また蘭学方を設置しオランダ書の翻訳と講義を実施するなど広く世界に目を向けた教育が行われました。

平泉の没後、長子であった大槻習斎が学頭に就任しました。習斎は父平泉の遺志を継ぎ、川内中坂通に養賢堂の支校である小学校（振徳館）を開校したほか、庶民の子弟のために養賢堂構内に日講所を開設し、教育水準の向上につとめました。

大槻平泉肖像
（『平泉先生真影』東東莱画 本館所蔵）

養賢堂をめぐる人々

仙台藩における総合学園として、養賢堂は多数の俊秀を輩出しています。養賢堂に学び明治期に各界で活躍した人物としては、自由民権運動家で五日市憲法草案を作成した千葉卓三郎、初代仙台市長を務めた遠藤庸治、財団法人斎藤報恩会を設立した斎藤善右衛門などが挙げられます。また学頭をはじめとする講師陣にも傑出した人物が多く、特に学頭を輩出した大槻一族は、仙台藩の学問の諸分野で重要な役割を果たしました。木町通小学校付属幼稚園（東北で最初の幼稚園）の創設者である矢野成文など、みやぎの近代教育の基礎を築いた人々もその多くが養賢堂につながっています。

今に残る養賢堂の遺構

仙台市若林区南鍛冶町の泰心院には、明治初期に移築された養賢堂の表門が山門として残っています（仙台市指定文化財）。この門は、大槻平泉による養賢堂の学舎拡張の際、講堂などに先駆けて完成したものです。

旧養賢堂表門（現 泰心院山門）

泰心院の境内には曹洞宗第二中学林（現在の東北福祉大学の前身）が置かれたこともあり、生徒から「赤門」と呼ばれていたといいます。大正年間にあった2度の火災や戦災も免れたのち、平成16年には修復工事が行われ、唯一残された養賢堂の遺構として現在もその姿をとどめています。

養賢堂のカリキュラム

養賢堂における教育は、文武両道を修めさせることを目的としていましたが、志望により単独の科目の履修も許可していました。5代学頭大槻習斎のころには、漢学・国学・書学・算法・礼法・兵学・蘭学・洋学・剣術・槍術・柔術・楽といった学科が設けられていました。養賢堂への入学は8歳からとされ、修業年限は特に定められていませんでしたが、17歳までに素読試験に合格しなければならず、また落第が3回に達すると退校させられることとなっていました。試験は春秋に行われる「試業」と、一学科の卒業試験として年末に行われる「改め」がありました。生徒数は未詳ですが、幕末ごろで通学生は1日1000名以上、履修者が多かった素読の講義では一朝650名にも達したといわれています。

養賢堂での手習い（小池裕斎『養賢堂諸生鑑』（本館所蔵）より）